

話、新生出版

教育社編 (1982) ニュートン 7月号マップ、教育社

釧路川共同調査団編 (1969) 釧路川、釧路市

国立科学博物館編 (1981) 国立科学博物館ニュース、150号、国立科学博物館

十勝の自然史研究会編 (1983) 十勝の自然を歩く、北海道大学図書刊行会

北海道新聞社編 (1984) 自然ガイドブック、北海道新聞社

山と渓谷社編 (1968) 野に咲く花、山と渓谷社

伊藤義治 (1973) 挿し木・接ぎ木、有紀書房

植田国夫 (1981) 浦幌町郷土博物館報告17号、植物の生育と環境、浦幌町郷土博物館

大政正隆 (1986) 森に学ぶ、東京大学出版会

館脇操 (1971) 北方植物の旅、朝日新聞社

栗原愛塔 (1967) 実用の薬草、昭和出版社

小松健一 (1987) 青春の北帰行、PHP研究所

佐竹義輔 (1967) 自然の手帖野の花、講談社

坂本直行 (1978) 北海道の木の実草の実、六花亭

田中瑞穂 (1962) 釧路市立郷土博物館館報No.12

9. 豊頃村大津の海岸草原群落をみて、釧路市立郷土博物館

——— (1963) 釧路の植物、釧路市

谷口弘一、三上日出夫 (1979) 北海道植物教材図鑑続野の花、北海道新聞社

宮脇昭 (1968) 科学朝日11月号、植物の我慢くらべ、朝日新聞社

———共著 (1971) 富士山、日本放送出版協会

明道博共著 (1972) 楽しい北国の庭と花づくり、北海道農業改良普及協会

安田齊 (1976) 花の色の謎、東海大学出版会

米司綾逸 (1983) 浦幌町郷土博物館館報告22号、原生花園と自然保護、浦幌町郷土博物館

## ベンチ状構造を有する擦文竪穴について

宮 宏 明

### 1. はじめに

ベンチ状あるいは、ベッド状などとよばれてい  
る一見、特殊な構造を有している擦文竪穴が少な  
からず検出されている。

本稿では、これらを比較検討し、擦文竪穴にお  
ける当該構造について若干考えてみたい。

この拙き原稿をまとめるにあたって御配慮いた  
だいた後藤秀彦氏をはじめ、御指導・御助力を賜  
わった岡田淳子・河野本道・大井晴男・沢四郎・  
佐藤忠雄・其田良雄・上野秀一・氏江敏文・鈴木  
邦輝・千代肇・西幸隆・大島秀俊・松谷純一・  
長谷川徹・瀬川拓郎・小野裕子・右代啓視・豊  
田宏良氏(順不同)他の諸先生・諸学兄に対し、  
心より感謝申し上げる次第です。

### 2. ベンチ状構造を有する擦文竪穴

#### の分布並びに時期

前述したようなプラットホーム状のベンチを有

する擦文竪穴が15遺跡(図1)、29例(表1)検出  
されている(註1)。やはり、当該期の遺跡が  
圧倒的に多く残っている道東・道北部に多数認め  
られる。表1のように浦幌町と枝幸町で検出され  
たもので半数を占める。

擦文式土器の編年に関する時期区分については、  
宇田川洋氏(1980)の分類に準拠したが、伴出  
土器が明確ではないものもあり、時期の判断は難  
しい。後期・晩期のものが多数(約75%)を占め  
るが、前期・中期に該当するもの(約25%)も少  
なからず認められる。

これまでに調査された擦文竪穴は、約800軒に  
のぼり、うち、当該構造を有するものは約4%で  
ある。今後とも検出例が増加することは確実であ  
ろう。より実態が明確化していくものと考えられ  
る。

### 3. ベンチの特徴とその分類

図2・図3のように従来の検出例より概略図を

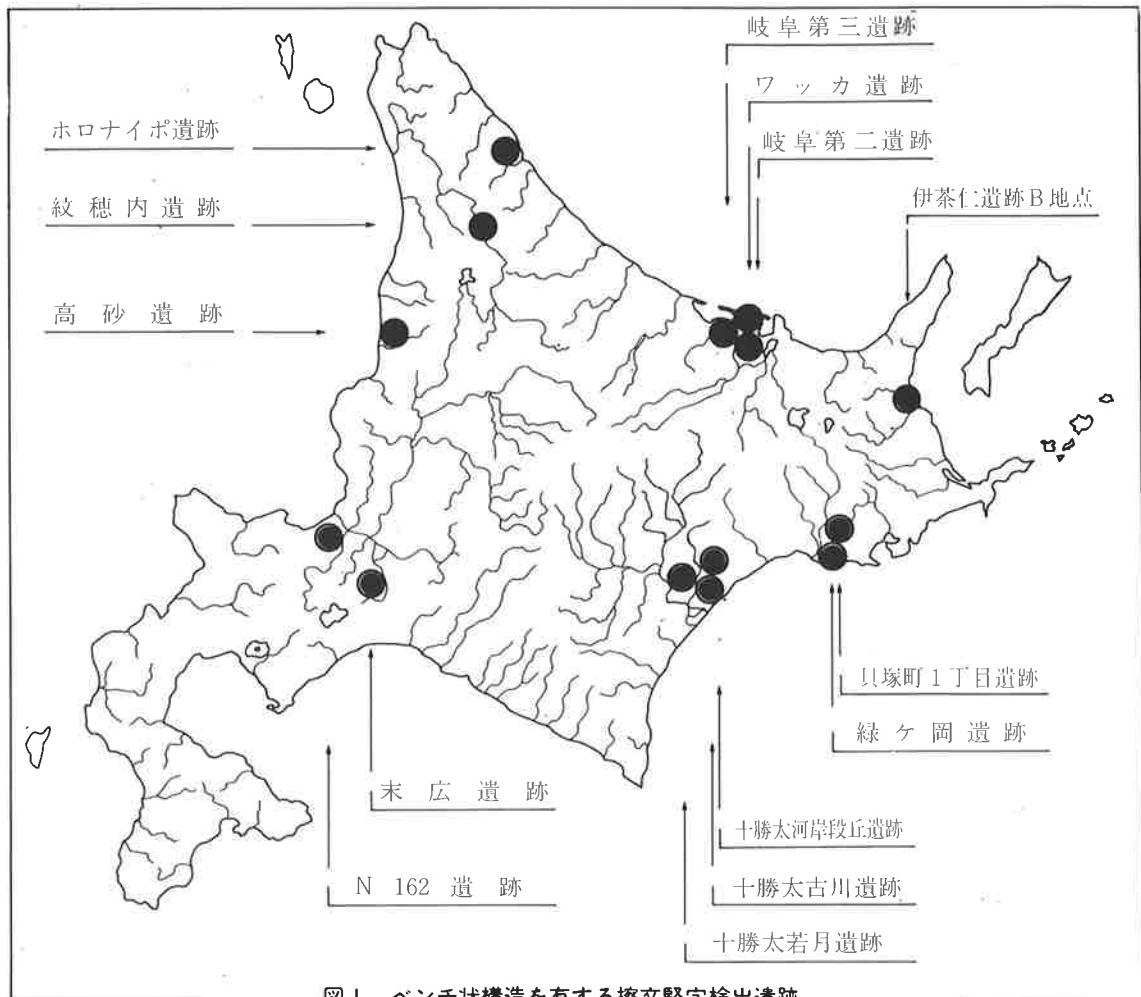


図1 ベンチ状構造を有する擦文竪穴検出遺跡

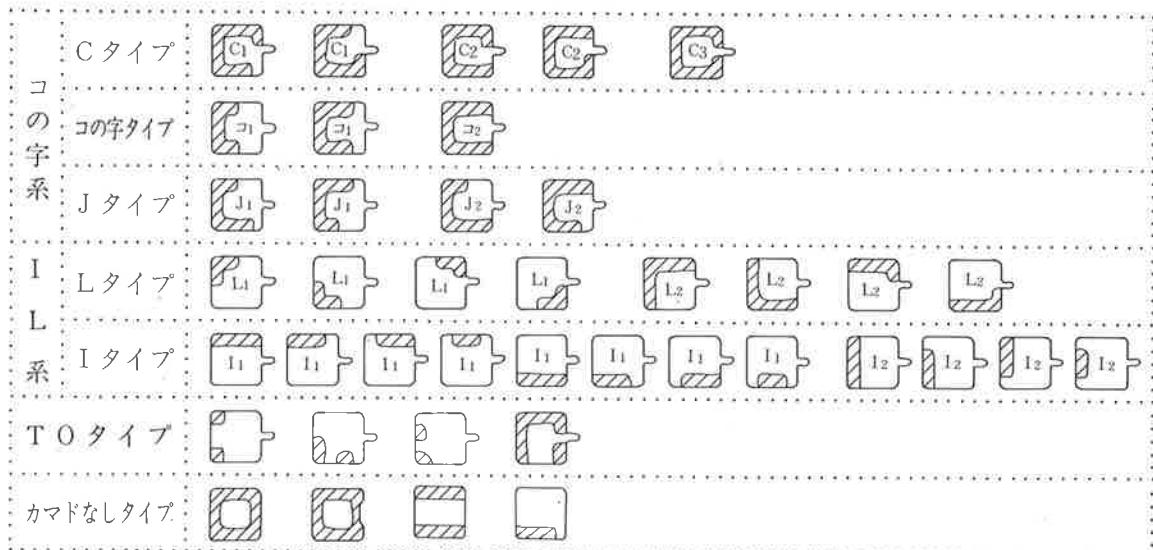


図2 ベンチ状構造を有する擦文竪穴の分類

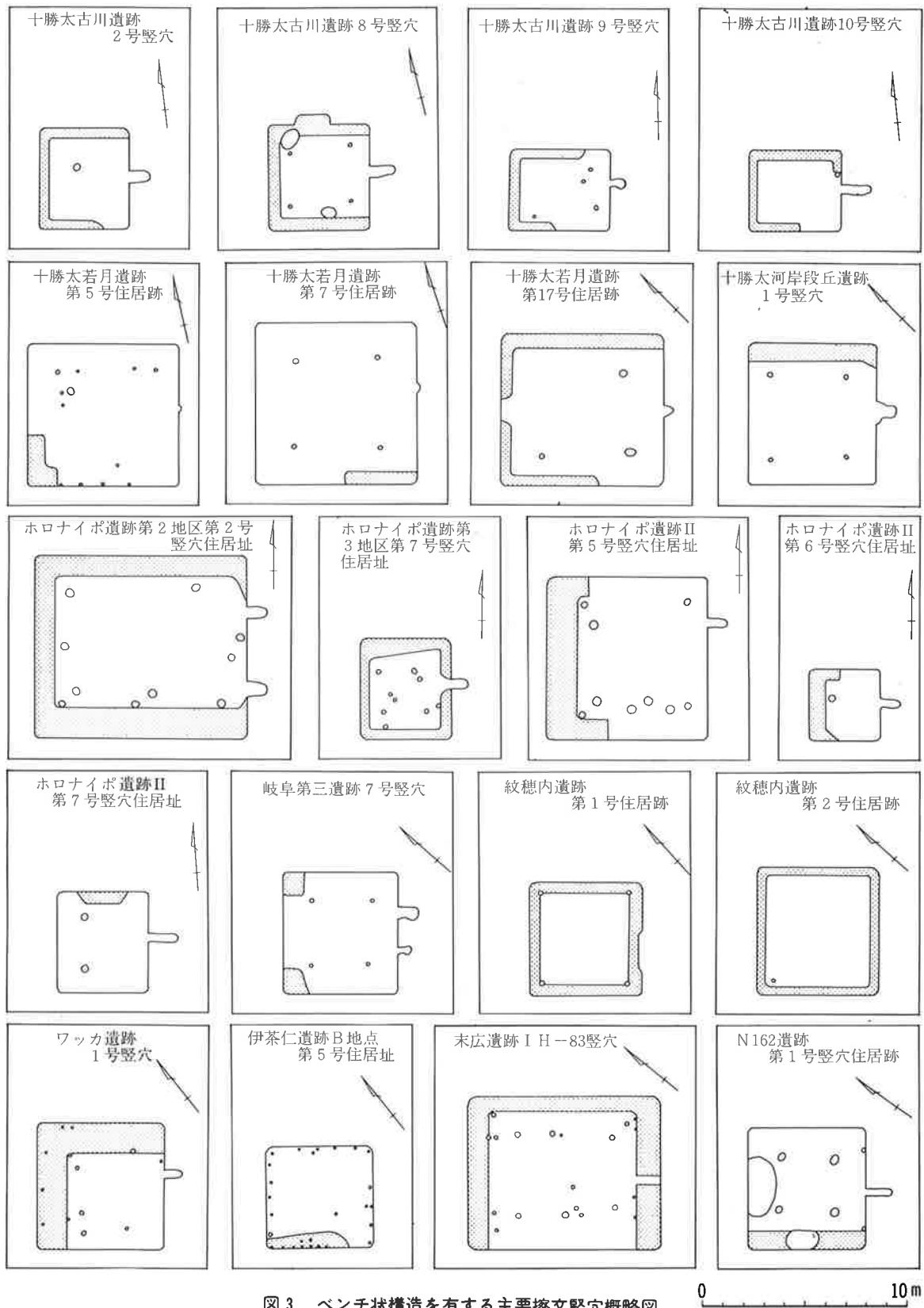


図3 ベンチ状構造を有する主要擦文竪穴概略図

0 10m

所在地	遺 跡 名	遺 構 名	文 献	類 型	時 期	豎穴の規模(cm)	ベンチの規模(幅×高)cm	カマドの方位	備 考
浦幌町	十勝太古川遺跡	2号豎穴	(浦幌町教委 1973)	J <sub>2</sub>	後 期	530×490	50×20	東	豎穴の外側に柱穴あり
浦幌町	十勝太古川遺跡	6号豎穴	(浦幌町教委 1973)	T O	後 期	690×670	28×25	東	主柱穴の内側に4ヵ所の地床が検出
浦幌町	十勝太古川遺跡	8号豎穴	(浦幌町教委 1973)	C <sub>2</sub>	後 期	540×500	100×20	東	北壁中央部が張り出している。
浦幌町	十勝太古川遺跡	9号豎穴	(浦幌町教委 1973)	J <sub>1</sub>	後 期	410×520	40×20	東	紡錘車3点が伴出
浦幌町	十勝太古川遺跡	10号豎穴	(浦幌町教委 1973)	C <sub>1</sub>	後 期	410×450	50×17	東	カマドの南隅よりマキリ伴出
浦幌町	十勝太河岸段丘遺跡	1号豎穴	(赤沢 威 1967)	I <sub>1</sub>	後 期	700×650	75×30	南東	火災住居
浦幌町	十勝太若月遺跡	第5号住居跡	(石橋・後藤他 1974)	L <sub>1</sub>	晚 期	700×760	75×20	東	袋状鉄斧が伴出
浦幌町	十勝太若月遺跡	第7号住居跡	(石橋・後藤他 1974)	I <sub>3</sub>	晩期(?)	810×480	55×25	東	伴出遺物ナシ
浦幌町	十勝太若月遺跡	第17号住居跡	(石橋・後藤他 1974)	T O	晩期(?)	780×800	75×25	南東	J <sub>2</sub> 型に類似、管状鉄器伴出
枝幸町	ホロナイボ遺跡第2地区	第2号豎穴住居址	(佐藤隆広 1980)	C <sub>3</sub>	(?)	1160×920	100×20	東	当該構造を有するものとしては最大の豎穴
枝幸町	ホロナイボ遺跡第3地区	第2号豎穴住居址	(佐藤隆広 1980)	L <sub>2</sub>	晩期(?)	460×440	10×20	南東	幅せまく小規模
枝幸町	ホロナイボ遺跡第3地区	第7号豎穴住居址	(佐藤隆広 1980)	C <sub>3</sub>	後 期	520×420	70×10	東	カマド部分を除く全辺にベンチを有する
枝幸町	ホロナイボ遺跡II	第5号豎穴住居址	(佐藤隆広 1981)	C <sub>1</sub>	中 期	760×830	120×15	東	カマドは北側に偏在
枝幸町	ホロナイボ遺跡II	第6号豎穴住居址	(佐藤隆広 1981)	C <sub>1</sub>	後期(?)	360×360	30×20	東	当該構造を有するものとしては最小の豎穴
枝幸町	ホロナイボ遺跡II	第7号豎穴住居址	(佐藤隆広 1981)	I <sub>1</sub>	晚 期	490×480	10×20	東	幅せまく小規模
常呂町	ワッカ遺跡	1号豎穴	(前田 潮 1972)	L <sub>2</sub>	晚 期	630×620	140×15	南東	幅広く小柱穴が認められる
常呂町	岐阜第二遺跡	W19号豎穴	(宇田川洋 1977)	I <sub>2</sub> (?)	(?)	840×(270)	50×20	(?)	豎穴が程度のみ残存
常呂町	岐阜第三遺跡	7号豎穴	(堀 晓 1977)	T O	晚 期	570×600	100×20	南東	2基のカマドを有する
美深町	紋穂内遺跡	第1号住居跡	(山崎博信 1970)	カマドなし	後 期	650×650	40×30	—	柱穴は当該構造に食い込んで四隅に存在
美深町	紋穂内遺跡	第2号住居跡	(山崎博信 1970)	カマドなし	後 期	650×650	20×15	—	豎穴を貫いてトレンチ状の擾乱あり
釧路市	綠ヶ岡遺跡	—	(未報告、註1)	カマドなし	前期(?)	—	—	—	詳細不明
釧路市	貝塚1丁目遺跡	—	(未報告、註1)	C <sub>3</sub> (?)	中期(?)	—	—	—	詳細不明
標津町	伊茶仁遺跡B地点	第5号住居址	(北構・石附他 1973)	カマドなし	後 期	500×550	65×10	—	多数の柱穴が壁際に並列状態で検出
小平町	高砂遺跡	B H-57	(峰山・宮塚 1983)	I <sub>1</sub> (?)	後 期	600×(400)	90×15	南東	1辺が川の浸食により若干破壊されている
千歳市	未広遺跡	I H-83豎穴	(大谷・田村 1982)	T O	前 期	950×750	130×25	南	大形豎穴、出土遺物多い
千歳市	未広遺跡	I H-93豎穴	(田村俊之 1985)	I <sub>1</sub>	中 期	560×530	30×30	南	当該構造は三日月状の張出し部に所在
千歳市	未広遺跡	I H-100豎穴	(田村俊之 1985)	カマドなし	中 期	420×400	80×10	—	柱穴は当該構造の側線に沿って検出
札幌市	N162遺跡	第1号豎穴住居跡	(羽賀・上野 1974)	I <sub>1</sub> (?)	前 期	600×600	90×15	南	当該構造を有するものと考えたい

表 I ベンチ状構造を有する擦文豎穴の属性

作成し、分類を試みた。カマドを有するものを基とし、コの字系・I L系とT O (その他の) タイプに分類した。

カマドを有するものの多くが、コの字系かI L系に属する。当初、無意味な細分とも考えられたが細分してみると、それなりの傾向を読みとることができたと考えている。今後、検出例が増加すれば、特に、カマドなしタイプ等に関しては、加筆・修正を必要としよう。コの字系のCタイプ・コの字タイプ・Jタイプは、カマドの奥あるいは、カマドを包み込むように掘り残されている。したがって、豎穴の面積に占める割合は、I L系に比

して大きい。

十勝太古川遺跡・十勝太若月遺跡・ホロナイボ遺跡に限定した場合、コの字系がI L系よりも先行するように考えることが可能である。先行するとみられる十勝太古川遺跡は、コの字系で、後出の十勝太若月遺跡は、I L系である。ホロナイボ遺跡でも、この傾向を認めることができる。

カマドの方位は、道東・道北では東向きが多く道央部では南向きが多い。いずれにしても、ほとんどが東~南の間に集中するようである。

ベンチの高さは、床面より10~30cmで、平均約20cmと比較的低い。ベンチの幅は、10~140cmと

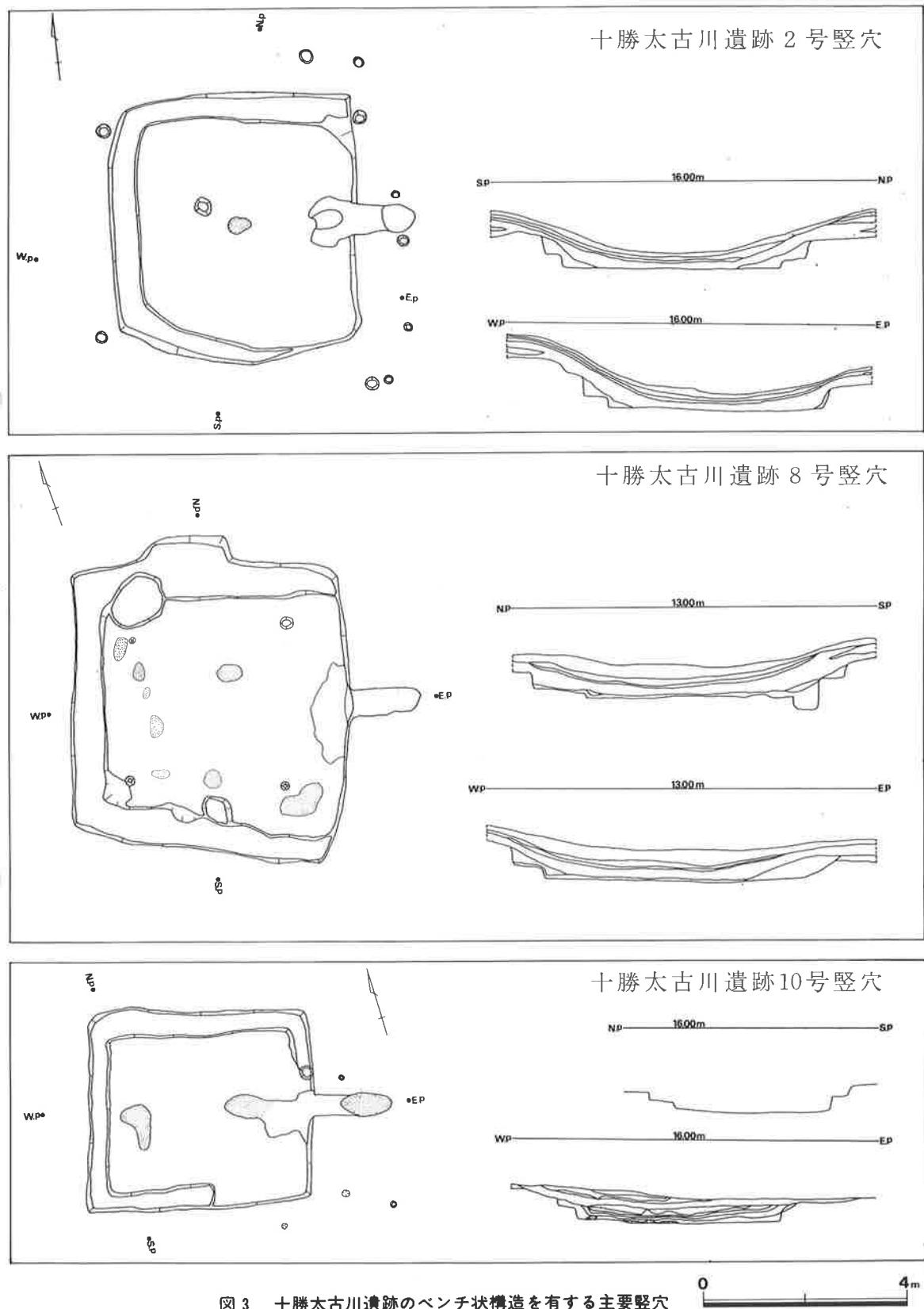


図3 十勝太古川遺跡のベンチ状構造を有する主要竪穴

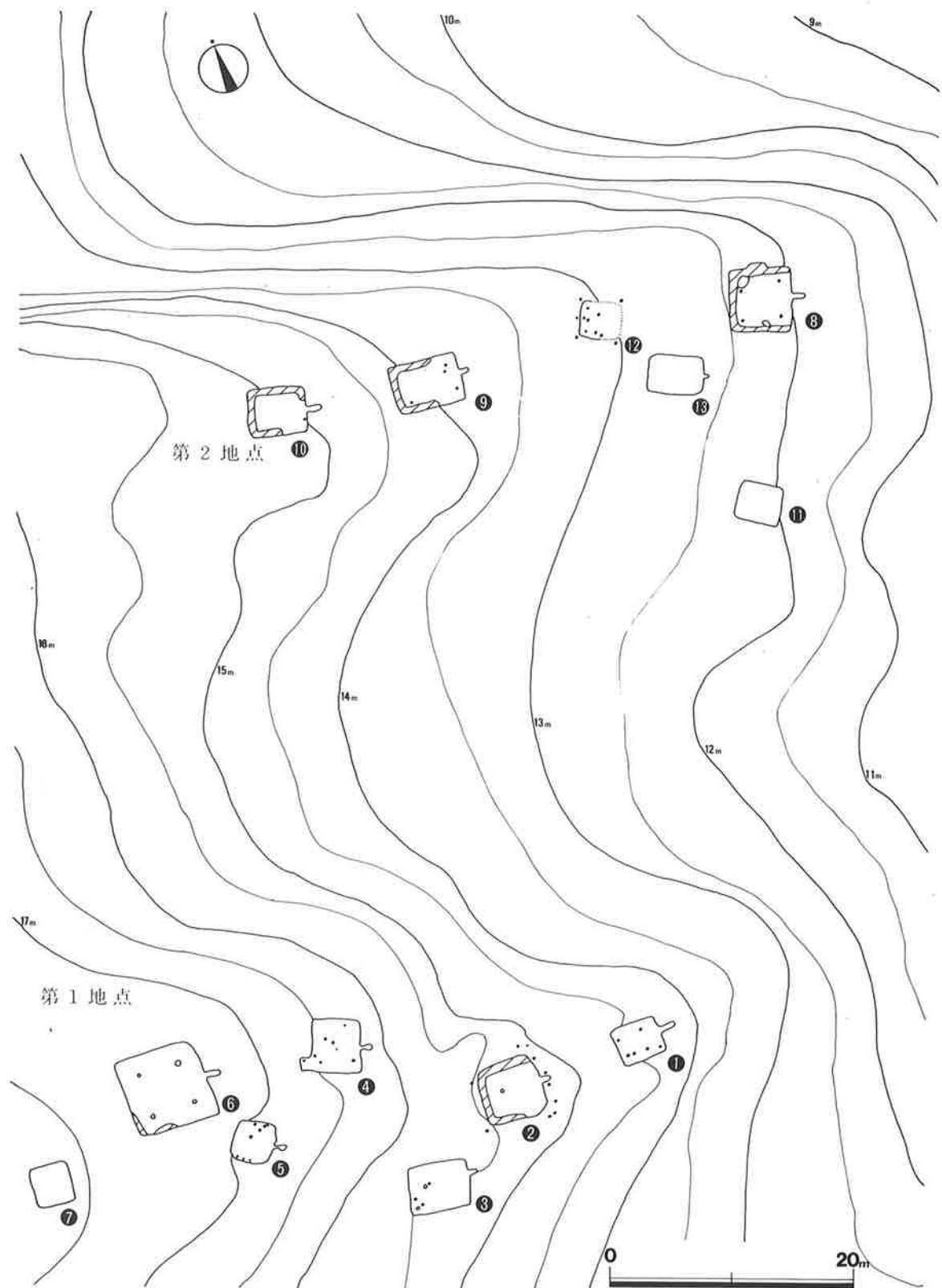


図4 十勝太古川遺跡におけるベンチ状構造を有する擦文竪穴の分布



2号竖穴検出状況 (W→E)

6号竖穴検出状況 (W→E)



8号竖穴検出状況 (S→N)

9号竖穴検出状況 (S→N)



10号竖穴検出状況 (S→N)



写真1 ベンチ状構造を有する十勝太古川遺跡の擦文竖穴 (2号・6号・8号～10号)

差が非常に大きい。これは、棚程度のものから、ダブルベッド様のものまでも含んでいるからであろう。特に幅の狭いものは、積極的には当該構造を意図していないものもあったと考えられる。又、竪穴検出方法に問題があったものもあるかもしれない。幅の平均は、約70cmである。ベンチとして使用するには充分であったろうし、よほど寝相が悪い人でないかぎり、ベッドとして使用に耐える幅を有していたと考えられる。

擦文竪穴において、明確に出入口の形跡が確認できた事例は非常に少ない。当該構造は、この出入口の位置関係を考える場合に重要である。

当該構造を有する竪穴として特異なものは、以下のとおりである。

**十勝太古川遺跡8号竪穴** 竪穴北壁のベンチ中央部は、幅1.4mに亘って外部に張り出している。

**十勝太若月遺跡第17号住居跡** カマドの反対側の一部分のみ繋がっておらず、出入口を彷彿させる。

#### ホロナイボ遺跡第2地区第2号竪穴住居址

当該構造を有する竪穴としては最大であり、カマド部分を除きベンチが総てに巡っている。

**岐阜第三遺跡7号竪穴** 北および西隅に腰掛け様の段あり。

**紋穂内遺跡第1号住居跡** ベンチが全周しており、柱穴は、このベンチにくい込むように四隅から検出された。

**ワッカ遺跡1号竪穴** 当該構造としては、最大幅を有す。

#### 4. 遺跡における当該構造

当該構造を有する擦文竪穴が遺跡においてどのような位置にあるのか、あるいは、どのような意味を有するのか、若干考えてみたい。

十勝太古川遺跡(図4)は、第1地点(7竪穴)と第2地点(6竪穴)からなり、当該構造を有する擦文竪穴が合計5軒検出されている。両地点ともに当該構造を有するのは、大きな竪穴のみに限られる。

又、同一時期に併存した竪穴数から両地点は、それぞれ2~3時期に亘るものであることが類推される(註2)。これは、同時併存の竪穴が2ないし3軒程度であり、うち大きな竪穴に当該構造

がみられたと考えられる。

十勝太若月遺跡でも当該構造を有する竪穴は、集落において中心的役割を果たしていたとみられ、大きな竪穴で集落の中程に所在する。

高砂遺跡は、周知のとおり200軒を超える擦文竪穴の調査が行なわれたが、当該構造を有する竪穴は、BH-57の1軒のみである。したがって、高砂遺跡においては、きわめて特異な存在であったといえよう。

末広遺跡のIH-83竪穴は、遺跡において最大の竪穴であり、やはり集落において中心的存在であったと考えられる。

#### 5. まとめ

以上、当該構造を有する擦文竪穴について若干考えてみた。縄文時代を中心とする当該事例については、いわゆる「日ノ浜型住居址」(高橋正勝1974)に詳しく述べられているところであるが、当該構造を有する竪穴は、各時代に亘り、東日本及び千島・樺太・沿海州等をはじめとする広い地域に少なからず分布しているものとみられる。

赤沢威氏(1967)が述べているように、ベンチ状構造は、北方諸民族の住居内のひとつの特徴でもある。多くは、木製の脚つき板張り状のベンチであろうが、最も簡便で、かつ又、寒さを凌ぐために都合がよかったと考えられるのが、竪穴構築の際にベンチを掘り残すという、この方法である。限られた竪穴住居のスペースを、より効率的に利用している事例である。

今後は、当該構造を有する擦文竪穴を東日本の縄文文化や古墳文化あるいは、北方諸民族の文化における住居址論の中での位置づけをめぐって、再に考えていきたい。

御教示いただければ幸いである

(北海道考古学会々員)

#### 註

(註1) 緑ヶ岡遺跡・貝塚町1丁目遺跡については、沢四郎・佐藤忠雄・河野本道・其田良雄・西幸隆・千代肇氏より御教示賜わった。

また、釧路で1987年10月に新たに当該構造を有する擦文竪穴が検出されたようである(近刊)。したがって、表1よりも1遺跡、1検出例多い。河野本道先生の御教授による。

(註2) 擦文文化遺跡のセトウルメント・ユニット等をはじめとする竪穴の分析については、いずれ後続の館報にて述べたいと考えている。

### 参考文献

- 赤沢 威 1967 「北海道十勝郡浦幌町十勝太遺跡調査報告」『人類学雑誌』第75巻第2号 10~25頁 日本人類学会
- 石橋次雄・木村方一・後藤秀彦 1974 『十勝太若月一第二次発掘調査一』 浦幌町教育委員会
- 上野秀一・羽賀憲二 1974 『札幌市文化財調査報告書』V 札幌市教育委員会
- 宇田川 洋 1980 「擦文文化」『北海道考古学講座』151~182頁 みやま書房
- 浦幌町教育委員会 1973 『十勝太古川・若月遺跡発掘調査概報—第一次発掘調査一』
- 大谷敏三・田村俊之 1982 『末広遺跡における考古学的調査(下)』千歳市教育委員会
- 北構保男・石附喜三男編 1973 『伊茶仁遺跡』 北地文化研究会
- 後藤秀彦 1983 『十勝地域における擦文文化の調査』『考古学ジャーナル』No. 213 17~20頁 ニュー・サイエンス社

- 佐藤隆広 1980 『ホロナイボ遺跡』 枝幸町教育委員会
- 佐藤隆広 1981 『ホロナイボ遺跡』II 枝幸町教育委員会
- 高橋正勝 1974 「日ノ浜型住居址—二段の床をもつ五角形プランの住居址について—」『北海道考古学』第10輯 77~88頁 北海道考古学会
- 田村俊之編 1985 『末広遺跡における考古学的調査(続)』千歳市教育委員会
- 藤本 強・宇田川 洋 1977 『岐阜第二遺跡』 常呂町教育委員会
- 藤本 強 1982 『擦文文化』教育社
- 堀 晃 1977 「7号竪穴」『岐阜第三遺跡』 36~39頁 東京大学文学部
- 前田 潮他 1972 「ワッカ遺跡」『常呂』 233~264頁 東京大学文学部
- 松田美砂子・村田良介 1981 「須藤遺跡」『斜里町文化財調査報告』I 斜里町教育委員会
- 峰山 巖・宮塚義人 1983 『おびらたかさご』 小平町教育委員会
- 山崎博信 1970 『紋穂内遺跡』 美深町教育委員会

## 十勝太若月遺跡出土の勾玉状土製品

後 藤 秀 彦

ここに紹介する資料は、1972~1974年の3年間にわたって浦幌町教育委員会が発掘調査した十勝太若月遺跡（北海道十勝郡浦幌町字下浦幌東5線南82番地所在）から出土したものである。資料は1974年の第3次調査の際、第21号住居跡の床面から発見されたものであるが、発掘調査報告書作成時には気が付かず、一土器片と考えていたので、報告書には記載していない。

十勝太若月遺跡は、浦幌十勝川（旧十勝川）の河口近くに発達した河岸段丘上に形成された十勝太遺跡群のほぼ中央に位置し、南に開いた馬蹄形の竪穴配置をもった擦文時代の集落跡である。発

掘調査では、このほかに縄文早期からアイヌ期にわたる一連の遺構・遺物が発見されたが、この中でも続縄文時代の後北C<sub>1</sub>期の墳墓が多数発見されたことや擦文時代の火災に遭った住居跡が検出されたことは大きな成果であった。当資料も、こうした擦文住居跡中から発見されたものであるが、資料の少ない当該時代の装飾品の例として貴重であると考えられるので、ここに紹介するものである。

資料は、Fig.1に示したように、一見して勾玉状を呈したもので土製品である。この土製品は長さ39mm、幅28mm、厚さ9mmで、断面は勾玉と違っ